

八木三男著『窓前の木の間から』に寄せて

三輪 定宣

窓前の木の間から

八木三男

A5版 231頁 ケイ・アイ・
メディア 2007年1月

にいがた県民教育研究所に申し込
む場合は2000円（送料込）

深い教養、達意の文章で綴られる八木先生のエッセイは、私の愛読書のひとつである。そのシリーズ、『市中凱風』『愁雲の街』『予後の風色』『措と臘梅』に続き、このたび『窓前の木の間から』（ケイ・アイ・メディア）が上梓された。題名の通り樹林に囲まれた八木邸の書

斎から、現代の教育、人間、社会の諸問題が鋭く切り取られている。その書斎に何度かお招きいただいた誼で、私にはその情景と文章の世界が渾然となり、さまざまな思い出が蘇る。

「不正義と反知性」はその巻頭文であり、現代の愚行の極ともいうべきイラク戦に狂奔するブッシュ大統領、それに追随し靖国参拝を強行する小泉首相（当時）の非道を、カントをはじめ一級の学者の著作に基づき批判した重厚な論評であり、そこに凝縮された正義と知性が刮目される。近隣の子どもたちとの交流などその人柄のにじむほかの味わい深い随想とは対照的である。二十数年前であろうか。私が東京大学で講義をしていた頃、若い学生にまじって白髪の紳士が熱心に受講

していた。八木先生であつた。長い教職経験をもつ教育現場のいわば“大家”が、初心にかえつて学部学生と机を並べて学問を探究される。当時、千葉大学教育学部で教員養成を本務としていた私には、教師教育と学問について考える強烈な契機となつた。このたび、本書の一文「わが友、高藤哲英」に、そのルーツを見出すことができた。

それは、高校・大学時代の親友を偲び、その影響を綴つたもので、そこに垣間見られる先生の学生時代の学問との邂逅は、専攻の史学のほか、アメリカの平和・黒人解放闘争、デューイの哲学・教育学、ソヴィエト教育学、フアシズムなど広汎な問題に及んでいる。「高藤からの知的刺激のなかで……知的領域の世界は広大で、吸収すべき問題が多面的に存在するという認識を青年期という人生の出発期にしっかりと身につけたことである。そして、その段階で、将来どんな職業につこうとも、社会的な発言をしていけるような知識人の自覚をもつて生きようと考えはじめた」とのべられている。教育学部に所属した親友・高藤氏の存在が、八木先生の人生選択、教職への道を方向づける潜在的要因だったのであろうか。

それは、大学固有の価値である学問の自由、学友との知的交流・刺激のなかで、知識人としての自覚が懐胎し、いわば大学での“第三の誕生”（自我のめざめる「第二の誕生」につづく知的めざめ）が、教職生活の根幹、源泉を形成したという一教師の自分史の事実である。それは、学問を基礎にした教員養成・教師の自己形成の実証であり、そこに「実践的指導力」の育成や習得に偏重する教員政策への根本的批判を読み取ることができ。

含蓄に富んだ新著は、読者の立場によりさまざまな“発見”の契機となろう。

（みわ さだのぶ・帝京平成大学教授）

